

第1章 脚光を浴びるグリーンツーリズム

1、グリーンツーリズムとその背景

(1) グリーンツーリズムとは

グリーンツーリズムという言葉は、一般的には耳慣れないが、近頃、耳にする機会が多くなった。グリーンツーリズムは、もともとヨーロッパで使われていた言葉であるが、日本では、10年ほど前から農林水産省が「グリーンツーリズム」という言葉を使って積極的に振興していることもあって、私たちにも身近になりつつあるように思われる。

「グリーンツーリズム」について、農林水産省は次のように定義をしている。『緑豊かな農山漁村地域において、自然、文化、人々との交流を楽しむ、滞在型の余暇活動』である。

つい先頃までは、ヨーロッパで発達した「農山村滞在型グリーンツーリズム」は、国民性や休暇に関する意識・制度の異なる日本では定着がむずかしいのではないかと思われた。しかしながら、巨大資本を投下して鳴り物入りで登場した大型観光施設「長崎・ハウステンボス」「宮崎・シーガイア」が相次いで会社更生法適用や外国資本に身売りするニュースを聞くと、日本でもレジャーに対する国民の意識の変化を感じないわけにはいかない。今日、これらの施設は、近隣、東アジアの人々の観光コースになっているようだが、日本人は、画一的な大型レジャーを卒業しつつあるのかも知れない。スキー場、ゴルフ場、遊園地といった大型レジャー施設は、一部を除いて閑古鳥が鳴いていて、身売り話には驚かなくなっている。

(2) 日本にもグリーンツーリズムの流れ

「鉄道もない、温泉もない、雪国でありながらスキー場もない、ゴルフ場もない、名前を言われてもほとんど知らない」、岩手県の県北に位置する人口9千人足らずの葛巻町は、大手デベロッパー主導の観光地化ではなく、地元の豊かな自然の恵みを生かして町づくり、といえは格好いいが、本当は大手企業から声がかかるような魅力的な土地ではなかったらしい。「ミルクとワインの町にしたい」という情熱だけで、自ら、『くずまち高原牧場』をつくって牛を飼い、生食用のブドウすら一粒もなかった町が、ブドウ栽培からはじめて『くずまちワイン』に乗り出してワイン醸造に取組んだ。

今では、丹精込めたブドウ100パーセントで醸すワインを求めて、また、高原の草を存分に食

んで育った牛たちのミルクやヨーグルト、ステーキを舌鼓みするために、全国から年間35万人の方が葛巻町を訪れるという。町づくりの青写真を描いたのも、出資したのも、原料を作ったのも、醸造したのも、すべて葛巻町民がかかわった、まさに「手造りの町おこし」である。それ故にこそ多くの人々を惹きつけたのだ。今日では、ワインだけで年間3億円を売り上げる、いう。

(3) グリーンツーリズムの本質

グリーンツーリズムの本質について、フランスツーリズム事情に詳しい大島順子氏は次のように解説している。今後、日本でもいろいろな形をとってグリーンツーリズムが発展していくに違いないが、究極の姿を知らないと、本質を見誤り取り返しがきかなくなる。

① 地元の人たちによる、地元の人たちのためのツーリズム

グリーンツーリズムは、外部資本が入ったツーリズム事業とは明確に区別されている。全国的、あるいは国際的なリゾート開発会社やホテルチェーンが行っている活動はグリーンツーリズムではない。大量にツーリストを呼び込み、自然環境や景観を無視した大規模ツーリズム開発は「インダストリー・ツーリズム」として、たとえ農村を舞台にしても「グリーンツーリズム」ではないとされている。地元の人たちが自分の生活を守る、あるいは地域が好ましい形で発展でき、そして事業による収益が地元に着ちることが大前提なのだ。農村には、都会とは違った景観や伝統が残っているが、それを郷土資産として守ることも、グリーンツーリズムの目的となっている。

② 地方色を強く感じるができるツーリズム

地方独特の文化や風土を味わえるのがグリーンツーリズム。そのため、開発にあたっては、その地方のカラーが強く出される。家や教会の造りにも、それぞれの地方の特徴があるが、それを尊重することが第一である。たとえ農村にあっても、画一的なコンクリート造りの宿泊施設は、グリーンツーリズムとしては扱われない。逆に、日本の小規模で風流な旅館は、フランスなら完全にグリーンツーリズムの範疇に入る。お客さんの方でも、日常とは違った生活ができることを期待している。その土地を訪れえた、その風土に溶け込んだ、という感覚を味わえるのがグリーンツーリズムである。そのゆえに、グリーンツーリズムは、ストレス解消になり、癒しの旅になるのである。

最近、日本では、旅館が高級化、大型化する傾向にあるが、料金を上げてまで高付加価値化することが本当に人々が求めているものなのか、ヨーロッパのグリーンツーリズムのあり様を見ると考えさせられる。

③ 利益追求の商売活動の要素が少ないツーリズム

フランスでは、農村民宿も、古い建造物を廃屋にしないための手段となっている。また、農村の人たちは、単調な生活に変化を与えてくれるツーリストが来てくれるのが嬉しい、という感覚がある。貸し別荘型の民宿などを利用したときには、この料金では採算が合わないだろうと思うことがよくあるが、古い家屋を廃屋にせずに維持できて、人との出会いがあればそれで良い、と思う人が多いのである。そんな雰囲気があるので、ツーリストは、民宿や農家レストランを利用する時は『お客様は神様』という態度はとらない。プロが経営するホテルやレストランと違って、お金を払っているのに、まるで友人に世話になっているような気遣いをするのである。

つまり、農村の人は、「ツーリストが来て良かった」と思い、ツーリストは、「暖かいもてなしを受けた」と感謝する。これが、グリーンツーリズムの最も大きな要素となっているのである。

(4) グリーンツーリズムと観光の違い

前述のように、グリーンツーリズムは、豊かな自然や美しい景観のある農山漁村を訪れ、交流や体験を通して楽しむ余暇活動である。また、自然環境から隔絶された都会の子供たちにとって、グリーンツーリズムは、自然や農林漁業、農村生活・文化を体験し、学習する貴重な機会である。近頃、長期休暇や修学旅行、総合学習の時間を利用しての体験型農山漁村学習が都会っ子に人気があるのは、グリーンツーリズムがもたらす「教育ファーム」機能の一つである。

これまでの農村観光は、雄大な景観、有名な歴史資源といった有力な観光資源に依存していたが、グリーンツーリズムでは、普通の農村のあるがままの姿が資源である。主な対象者は、観光では不特定多数の通過型観光客であるが、グリーンツーリズムではリピーターの確保が主テーマとなる。

【観光とグリーンツーリズムの違い】

項 目	従来の観光	グリーンツーリズム
資 源	有力な観光資源がある	普通の農村のあるがままの姿
主な対象者	不特定多数の通過型観光客へのビジネス的接客	リピーター（交流者）に対する体験・ふれあい
地場産業との結びつき	弱 い	強 い

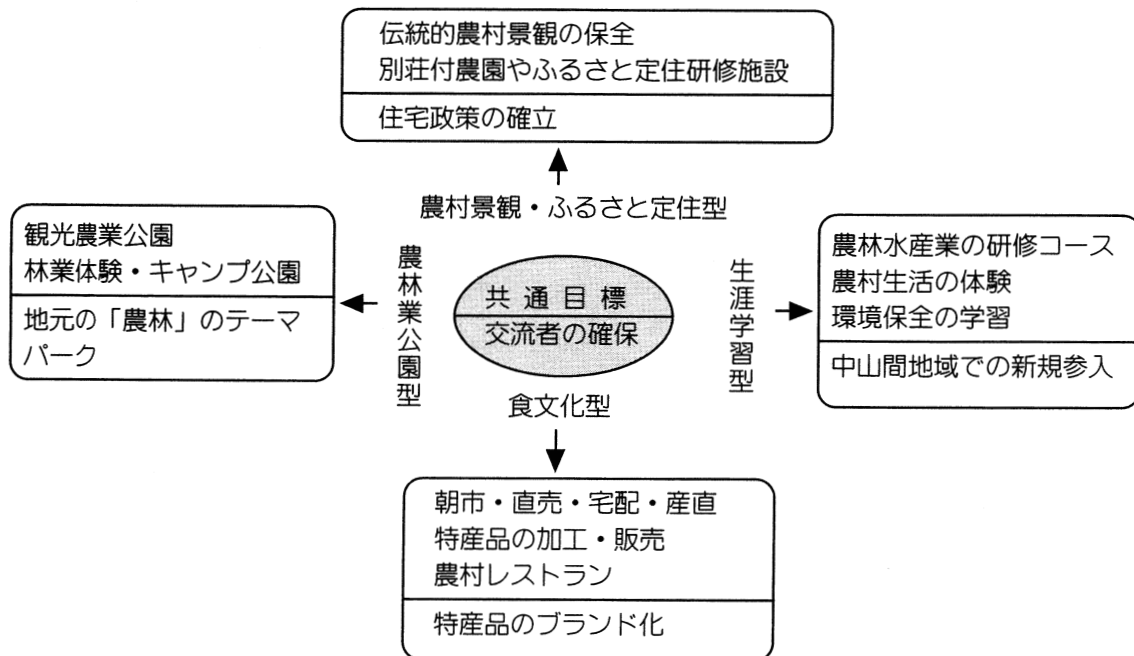
出典：「人と地域を生かすグリーンツーリズム」

2、日本型グリーンツーリズム

(1) グリーンツーリズムの四タイプ

宮崎猛氏によれば、日本のグリーンツーリズムは、おおむね四タイプに分けられる、という。イ）都市近郊に多く見られる「農林業公園型」、ロ）全国的に展開している農林水産物資源を活用した「食文化型」、ハ）中山間地域で多い「農村景観・ふるさと定住型」、二）農林水産業や農村環境をテーマにした「生涯学習型」、の四つである。

【グリーンツーリズムのタイプ】

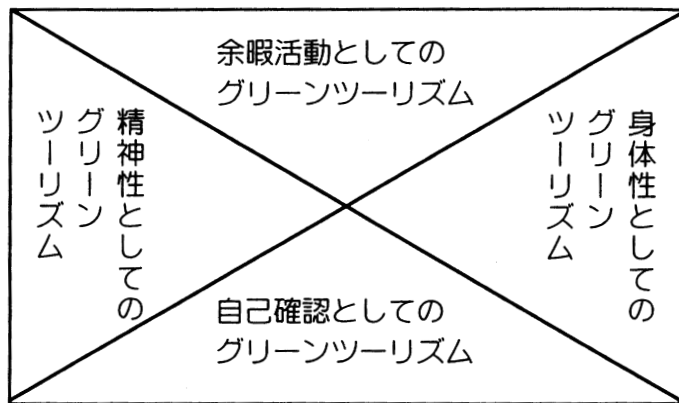


出典：「人と地域をいかすグリーンツーリズム」

(2) グリーンツーリズムに出かける理由

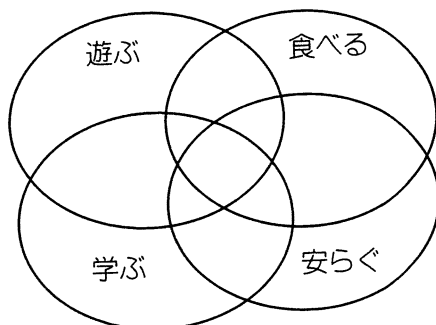
人々がグリーンツーリズムに出かける理由を、池上甲一氏は、以下のように分析し、解説している。

グリーンツーリズムによる五感の充足は、基本的に身体性と精神性の二面からなる。身体性としての「動き」の側面が強めれば、余暇活動的な性格が濃厚になって来るし、精神的な「くつろぎ」の色彩が強めれば、自己確認的な性格が濃厚になる。



【グリーンツーリズムの多面性】

池上甲一氏は、このようなグリーンツーリズムの多義性に、具体的な行動をパターン化させ対応させて次の図のように解説している。基本要素を、「食べる」、「遊ぶ」、「学ぶ」、「安らぐ」の四つに規定し、『る・ぶ・ぶ・ぐ』、と呼ぶ。それらは、時には、相互に無関係でなく、例えば、食文化に触れ、その調理・体験に参加すれば、「食べる」ことが「学ぶ」ことでもある、と。

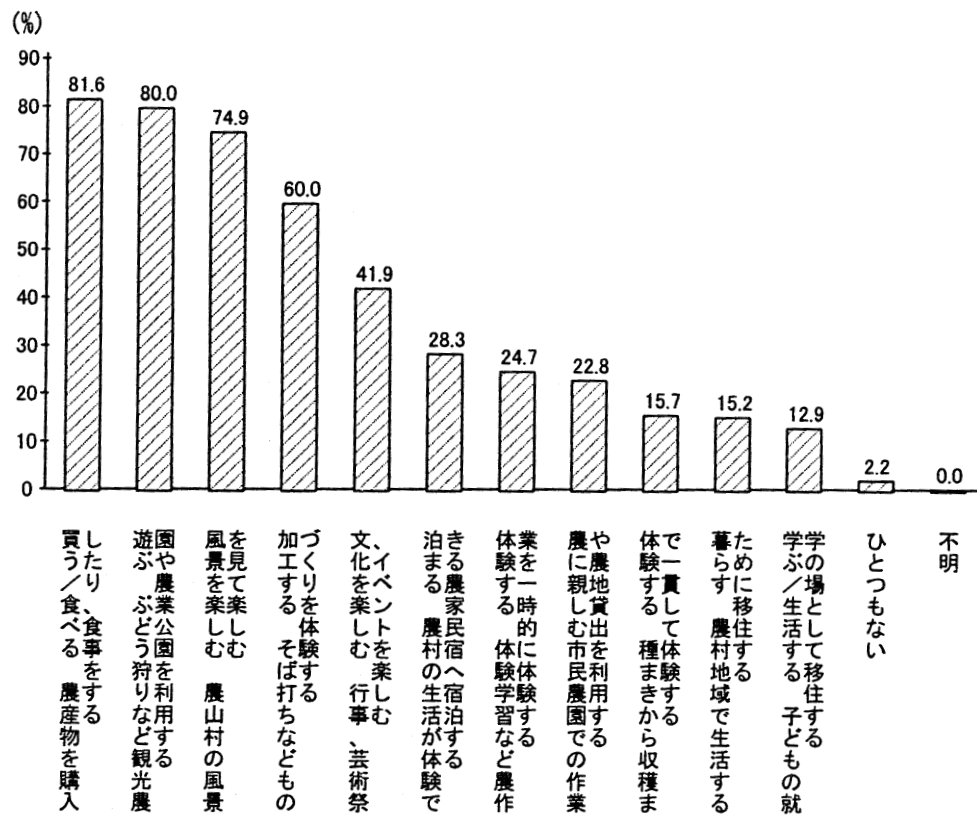


【グリーン・ツーリストの『るぶぶぐ』】

出典：「人と地域をいかすグリーンツーリズム」

- グリーツーリズムに出かけてどんな過ごし方をしたいか、(財)都市農山漁村交流活性化機構の調査データを参考資料として紹介したい。Web調査なので、60代の声が少ないが、14,002サンプルなのでおおかたの声が反映されている、と考える。

【今後、農村地域において経験したいと考える過ごし方】



出典：「都市住民のニーズ把握定量調査」

(3) グリーンツーリズムへの対応——ビジネス化の視点

95年から施行された「農山漁村滞在型余暇活動のための基盤整備の促進に関する法律」は、グリーンツーリズムに関する農村側の受け入れ体制を整備するものであり、さらなるグリーンツーリズムの推進を目的にしている。観光客が求める農村情報として、上位5位に、『食』に関する項目が2つ入っており、都会住民のグリーンツーリズムに出掛ける大きな目的になっている。

【農村の情報として欲しいもの】

項 目	比 率
旬の食べ物	52.7%
宿泊施設	50.8
四季折々の自然の便り	48.9
祭りやイベントの開催状況	33.7
郷土料理、特産品など	33.0
地域への交通機関	24.6
郷土芸能の歴史・由来	16.7
花の便り（名所・開花期など）	15.9
農林漁業体験施設	14.8

データ：1997 和歌山県南部の観光客265人 複数回答

都会住民のグリーンツーリズムのニーズに応え、地域経営につなげて行くためには、地域の持ち味を活かした「ビジネスマインド」が欠かせない、と池上甲一氏はいう。

① 加工品の質をみがく

農業漁業は本来、生産・加工・販売・各種サービスのトータル産業であるが、これまでは、加工以下のプロセスを第三者に任せてきた。グリーンツーリズムは、そのトータル性を発揮する有力な手段といえる。農山漁村における現代的な経済上の課題は、付加価値をいかに地域の中にとどめるかにある。これまでの農林水産物加工は、同一規格品の大量生産によるコストダウンを迫られてきた。新しい農水産物加工はそのような価格競争力ではなく、多少高くても売れる加工品を目指すべきである。そのためには、加工の質を磨き、個性的加工品のこだわり生産に重点を置くことである。個性的加工品は、原料へのこだわり、製造過程の技術革新、文化的価値の付与、新しい販売方法によって可能である。

② マーケティング力をみがく

個性的な加工品は時にはすき間商品として、新しいニッチ市場を発見することになるかもしれない。その成否は、差別化と市場性の事前調査にかかっている。加工品の新規開発をねらう漁山村にとって、グリーンツーリストは格好の調査対象である。この場合、調査コストを節約できるのみならず、販売ネットワークづくりの第一歩となる。大規模宣伝する力がなくても、グリーンツーリズムを通じて、「口コミ」というもっとも強力な販売拡大手段を使うことができる。

また、新規加工品は、委託生産もひとつの手である。委託生産は、生産システムを持たないため、投資リスクが少ないという利点がある。さらに、競争原理が働けば、低生産費経営を可能とする。問題は、商品コンセプトにかなう提携先の模索である。

加工品の質をみがくうえで、加工研究所的な研究機関が不可欠である。加工品の開発、副産物の利用、原材料の吟味からネーミング、パッケージ、販売方法、顧客管理のノウハウにいたるまでトータル・マーケティング機能をアドバイスいただける。

③ 「市」を考える

多くの農山漁村にとって、流通の多元化が課題となっている。ファーマーズマーケット、産直、コーポ、産消提携などその形態はさまざまであるが、「市」はひとの交流をすえるグリーンツーリズムと深くかかわっている。逆に、グリーンツーリズムの「市」は、戦略拠点となりうる。「市」は、マーケットニーズの把握、流通コストの低減、市場出荷が難しい小ロット品目の商品化など著しい流通改善効果をもたらす可能性がある。

「市」がうまくいくための秘訣は、これまでの流通の考え方と全く異なることを認識することである。少量でも多くの新鮮な品目をそろえ、その組み合わせで「周年供給」することが大切である。換言すれば、少量多品種生産、異種品目の通年供給とそのための計画的作付けが基本条件となる。

「市」は対面販売であり、直接消費者と顔を合わせる。だから、消費者が何を欲しがっているか、「生の消費者情報」を得ることができる。それは、生産者にとっても虫眞や馴染み客ができることにも通じる。だから、「市」の商品には、生産者の個人情報や栽培方法など「氏素性」を明らかにし、対話機会を増やすことが大切である。それを通して新しい食べ方の提案や商品開発のヒントを得ることができる。

3、「九州ツーリズム大学」誕生

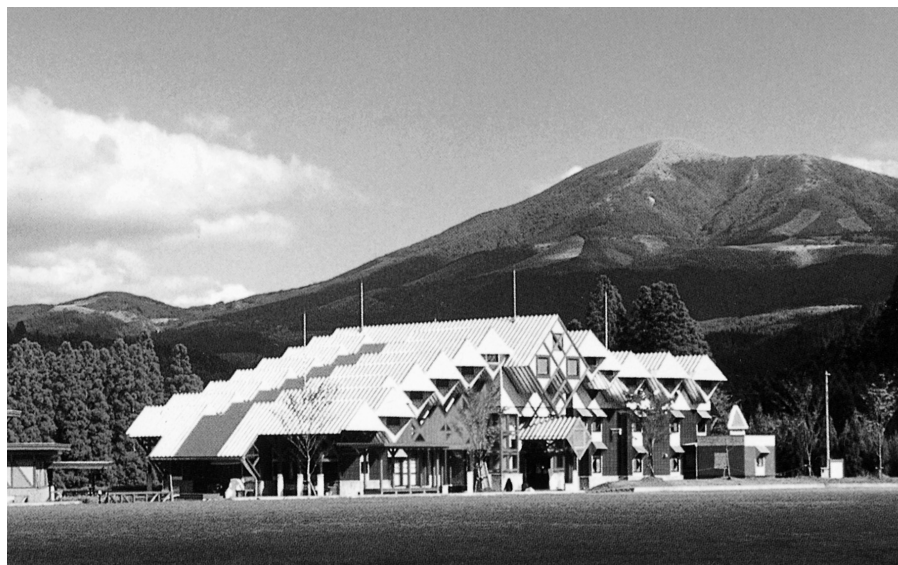
(1) 日本の原風景「熊本県小国町」のあらまし

熊本県の最北端、大分県に隣接する小国町は、人口9200人（03年現在）の、林業、畜産業・農業を主とする中山間地域に属する山村である。近くには、温泉のメッカ、湯布院、黒川温泉があるが、玄人筋には、小国町の評価が高い、という。総面積の74%は山林が占め、「小国杉」として名高い人工林が美しい町である。手入れの行き届いた杉林は、京都「北山杉」のそれを思い起すほど。小国町は、小国杉を使用し、木材を使う一流建築家を総動員して町の主要施設を造っているので、点在する大型施設の木造建築物がとにかく洗練されている。

ペスト菌発見で世界的に名高い北里柴三郎にちなんで次代の人材育成を目指す研修宿泊施設『木魂館』、道の駅『ゆうステーション』、日本最大級の木製トラスト構造『小国ドーム』、JA直営物産館『びらみっど』、木目デザインが見事な『森林保全管理センター』など枚挙にいとまがない。木造建築作品の「アートめぐり」ができるほどである。また、北里博士を生んだまちだけあって町づくりの考え方や佇まいが知的なのである。古い、大きな庄屋風建物があつたかと思えば、そこが、パリを主舞台として活躍した抽象画家の巨匠「坂本善三郎」（小国町出身）美術館なのである。究極の「和」デザインが近代抽象絵画に通じることを発見したのも収穫であった。

そんな訳で、町にある一般レストランや雑貨店などの、店構え、地場産品のモノづくりやパッケージに、「デザインを重視する伝統」が生きている。

研修宿泊施設
〔木魂館〕



小国杉を守る
〔森林保全管理センター〕



古い民家を移築した
〔坂本善三郎美術館〕



【坂本善三美術館カタログ】



(2) 「九州ツーリズム大学」設立のねらいと事業概要

こんな環境の町に「九州ツーリズム大学」が開設された。その契機となったのは、その前年に開催された「九州ツーリズムシンポジウム」であった。テーマは、農村と都市の対等な交流による「旅文化の創造」と、「文化的視点からツーリズムへアプローチ」、であった。その多彩なパネリストによる議論の展開の中で、参加者から「人材育成や実践的なノウハウを学ぶ場が欲しい」という要望があがった。こうした問題提起を受けて、恒常的なツーリズム学習の場を、まちづくりとの関連で創造する、という独自の発想が生まれた。ツーリズムの担い手やコーディネータ的人材育成と、ツーリズム情報の発信拠点として、研修施設・学びやの里「木魂館」をベースに「九州ツーリズム大学」を開設するにいたったのである。

この大学の特質は、学問的だけでなく、実践性にも重点が置かれ、豊富な専門スタッフが動員された。学長を務める宮崎町長自ら教壇に立つ一方、熊本大学佐藤誠教授が「ツーリズム学科長」、法政大学岡崎昌之教授が「観光まちづくり学科長」に就任し、他にツーリズム研究の最前線にいる大学教員、ツーリズム業界関係者、農家民宿・農家レストラン経営者が講義や実習を担当した。別表は、2003年度のカリキュラム（大学日程）であるが、ツーリズムの学際を総動員していることが見て取れる。年間のスケジュールは、9月から翌年3月まで7ヶ月間、毎月一回、原則土曜日から月曜日の二泊三日、合計7回研修となっている。入学金、授業料、宿泊費込で、おおよそ20万円となっている。

2003年度で開設7年を数えるが、卒業生は600名に達する。卒業生の進路は、農家レストランや農家民宿を開設する者、農山村での移住を目指す者、公務員や民間コンサルタントや学生も多く、グリーンツーリズムの実践指導や支援を行う人材が数多く輩出されることの意義は大きい。さらに、大学付属幼稚園・小学校的機能として、「子供自然学校」「幼児自然学校」が開校されている。幼児や児童を対象とした自然教育・環境教育をツーリズムの範疇の中で行うものである。

【2003年度九州ツーリズム大学日程】

	日程	内容	講師
第1回	9月13日(土)	入学式 記念講演(仮題)「ツーリズムと観光」 学長講話「九州ツーリズム大学は今!」 関係者挨拶 「新入生ツーリズムを語る!」	楓千里(JTB「旅」編集長) 宮崎暢俊(九州ツーリズム大学学長・小国町長) 九州農政局・熊本県など 自己紹介/進行・事務局
	14日(日)	講義:観光まちづくり概論 講義:ツーリズム概論 ワークショップ:集落ツーリズムマップづくり 体験:里泊まり(交流会合)	岡崎昌之(法政大学現代福祉学部教授) 佐藤 誠(熊本大学法学部教授) 北里地区里泊まり研究会 奴留湯ふれあい会館 湯ノ本会館関係者
	15日(月)	ワークショップのまとめ&報告 体験:「山野草で石玉盆栽を作ろう!」	北里地区里泊まり研究会 小国町ツーリズム実践研究会
第2回	10月11日(土)	ワークショップ:旧国鉄線廃線跡地を歩く 講義:「グランドワーク」 ワークショップ:旧国鉄線廃線跡地の利活用 実習:「写真を読む」	小国町旧国鉄宮原線検討委員会 青木辰司(東洋大学社会学部教授) 小国町旧国鉄宮原線検討委員会 長野良市(アースライブラリー主宰)
	12日(日)	WS発表:旧国鉄線廃線跡地の利活用 実習:習農体験「柿を採る!」 イベント:北里偉人祭	小国町ツーリズム実践研究会 北里偉人祭実行委員会
	13日(月)	実習:習農体験「干し柿作り・山芋掘り」	小国町ツーリズム実践研究会
第3回	11月8日(土)	講義:「どうなる!日本のグリーン・ツーリズム」 講義1:女性と交流ビジネス 講義2:女性と交流ビジネス WS:レストラン・直売所の企画	山崎光博(明治大学農学部教授) 本田 節(熊本・人吉ひまわり亭主宰) 原田則子(鹿児島・牧園町 WaiWai アトリエ代表)
	9日(日)	レストラン・直売所の準備 一日直売所・レストランを運営する 体験:農家民宿・商家民泊・畑付き別荘	小国町ツーリズム実践研究会・タウンツーリズム研究会
	10日(月)	WS:秋のトレッキングコースを歩く	小国の水源と広葉樹を訪ねる会
第4回	12月6日(土)	講義:料理とホスピタリティ 実習:キッチンスタジオ 発表:キッチンスタジオ	新江憲一(湯布院:草庵秋桜料理長) 新江憲一(湯布院:草庵秋桜料理長) 宮口同通(九州大クッキングアドバイザー)
	7日(日)	公開討論:ツーリズム情報の現状と課題	竹内寛文((株)JTB出版:「旅」編集部) 柴川仁宏((株)リクルート:「じゃらん」編集部) 大川隆司((株)電通九州) 養父信夫(九州のムラ編集長) 関司直也(東京大学大学院・進行)
		早稲田大学地域貢献公開講座 「風景と食とツーリズム」	宮口同通(早稲田大教育学部教授)
		早稲田大学地域貢献公開フォーラム 地域社会と大学とのパートナーシップを考える!	早稲田大学地域貢献講座 (早稲田大教育学部宮口同通研究室) (早稲田大学理工学部後藤春彦研究室) (宮崎暢俊小国町長)
	8日(月)	実習:まち歩き・タウンツーリズム	小国町タウンツーリズム研究会
第5回	1月10日(土)	ワークショップ:温泉とツーリズム 講義:環境教育とツーリズム 実習:空飛ぶ宝物探し うさぎ追い作戦会議	若井康彦(国土交通省地域振興アドバイザー) 山口久臣(野外教育研究所所長) 杉浦嘉雄(日本文理大助教授) 秋吉祥志(うさぎ追い隊長)
	11日(日)	体験:うさぎ追い大作戦 実習1:ツリーハウスを作ろう	岩元幸明(農師)秋吉祥志(隊長) 小国自然学校スタッフ
	12日(月)	実習2:ツリーハウスを作ろう	小国自然学校スタッフ
第6回	2月7日(土)	講義:舟板昔ばなしの家のこの一年 講義:「高齢者の活用によるツーリズム」	中山ミヤ子(大分県安心院町:農家民泊実践者) 近藤廣平(長野県浪合村)
	8日(日)	講義:「湯布院における観光とツーリズム」 ワークショップ:湯布院タウンウォッチング 実習:湯布院交流会	米田誠司(由布院観光総合事務所事務局長) 由布院観光総合事務所 大分県湯布院町観光クラブ等との交流会
	9日(月)	講演:「湯布院まちづくり物語」	中谷健太郎(ゆふいんグリーンツーリズム研究所所長)
第7回	3月13日(土)	講演 卒業フォーラム	小田切徳美(東京大学大学院助教授) 佐藤誠・岡崎昌之各先生
	14日(日)	卒業制作	講師未定

なお、都合によりカリキュラムの一部が変更になる場合もあります。注:WS=ワークショップを表しています。

出典:「九州ツーリズム大学2003年度資料」

(3)「九州ツーリズム大学」とその影響

小国ツーリズムの多様な実践を支える組織として、学習交流拠点『木魂館』の他に、「小国町ネットワークビューロー」が2003年に設立された。設立趣意書によれば、次のような活動を目指している。

- イ) 九州ツーリズム大学のノウハウを生かす
- ロ) 地域とのつながりを強める
- ハ) 小国ネットワークビューローのオフィス開設
- ニ) 農的組織やツーリズム関係組織との連携を図りUJIターンを促進する
- ホ) 都市の若者との交流を進める

熊本県小国町で開始された「九州ツーリズム大学」の理念と成果は、その基本型を踏襲しながら、「北海道ツーリズム大学」（北海道鹿追町）、「南信州めぐり大学院」（長野県飯田市）、そして2004年開校の「東北ツーリズム大学」（岩手県遠野市）と受け継がれ、交流拡大がはじまっている。

特に7年目を迎える「九州ツーリズム大学」は、学生スタッフがリピーターになり、自己実現を図りながら最終的に小国町にIターンするというケースが少なくないという。

このように、「九州ツーリズム大学」は地域での実践的ノウハウを確かめながら、グリーンツーリズムの日本における指導的パイオニアとして、これからも牽引して行くに違いない。